



季刊

ほけわん

ISSN 1346-4191

2013・12

No. 61

富山大学保健管理センター



発達障がいとナラティブ・アプローチ ～大学における支援～

(富山大学保健管理センター)

斎藤 清二

はじめに

発達障害（障がい）という言葉は、最近ではとてもありふれた言葉として語られるようになって来た。しかし例えば、「発達障がいとは病気なのか？」という素朴な疑問が話題になることも珍しくない。この疑問に対してどう答えるかは、実は簡単ではない。医学モデルでは「障害＝disorder」であり疾患として理解される。社会モデルでは「障がい＝disability」であり社会資源へのアクセスの保証が重視される。現場ではひとつのモデルだけでは対応できない。発達障がい支援一般に言えることだが、医学モデルでも「診断－治療モデル」と「リハビリテーションモデル」では強調点が違い、非医学モデルでも「特別支援教育モデル」と「心理臨床モデル」は一部相容れない部分もある。問題は、一つのモデルに固執すると他のモデルの良いところが利用できなくなることである。

高機能の発達障がいのある方への支援は、大きく「パーソナル支援」と「環境調整」に分けられる。前者には「心理臨床モデル」と「心理教育モデル」を組み合わせ、後者としては「社会モデル」による「合理的配慮の探求」で臨むのが現実的である。その基盤を支えるのは「ナラティブ・アプローチ＝良

もくじ

発達障がいとナラティブ・アプローチ～大学における支援～	1
発達障害のある大学生支援の社会的動向	4

質な対話」であると私達は考えている。本稿では、高機能の発達障がいのある方々（例えば大学生）への支援の基盤としてのナラティブ・アプローチについて概説してみたい。

ナラティブ・アプローチから見た「現実」

通常私達は「現実」とは私達によって認識されている疑うべからざる実体であると考えており、「現実」を正しく認識し、適切な行動選択によってそれに対処していくことで、問題を解決したり、良く生きていくことができるかと素朴に信じている。言葉を変えると、私達を取り巻く「現実」とは、私達がどのように考えるか、どのようなことを語るか、どのようなことを期待するかということに先行して、先験的（ア・プリオリ）に実在しているものであると考える。例えば発達障がいという障がい、あるいは発達障がいのある人（学生）は、現実中存在しており、私達はそれを正しく発見し、正しく理解し、正しく支援することを目指す必要がある、と考える。しかし、ナラティブ・アプローチは、必ずしもそのような見方をとらない。

ナラティブ・アプローチは、むしろ私達は、社会的な相互交流において「発達障がい」という言葉を用い、「発達障がいについての物語」を語り合うことによって、「発達障がい」という現実（あるいは"現実"として私達が共有するもの）を創りだしている、と考える。もちろんこれは、「社会的コミュニケーションが困難であるためにキャンパスライフや社会における支援を必要とする人など実際には居ない」などということをおうとしているのではない。そうではなくて、私達はそのような具体的な個人との対話、あるいはそのような個人をめぐる対話の中で、「発達障がいという物語」を語りあうこともできるし、それとは違う物語を語りあうこともできるということが重要なのである。

発達障がいをめぐる複数の物語

それらの物語には、「障がい」だけではなく「病気」とか「特性」とか「個性」とか「能力」などとラベルされるものが含まれるだろう。ナラティブ・アプローチは、そのうちのどれかが唯一正しい物語であるとは考えず、複数の物語の併存を許容し、その具体的な時点、その具体的な状況、その具体的な文脈における最も有用な物語を採用すればよいと考える。

もちろん、物語であればどれも同じであるというわけではなく、ある個人を「発達障がい」という物語を通じて理解するか、それとも例えば「個性」という物語を通じて理解するかによって、その後の交流は大きく異なってくる。

「発達障がい」という物語を採用すれば、人生において彼に生じる様々な困難は、本人の努力や責任に帰せられるものではなく、環境が調整され、社会的資源へのアクセスが提供されるべきものとなる。それによって、彼がそれまで担わされてきた自責感が軽減し、困難が著しく改善することが期待できる。しかし一方で「発達障がい」という物語は「障がいとは生得的なものであり、根本的特性は生涯変わることはない」という見解を主張するものでもある。このような物語が共有されることは、経験を通じて変化し、成長していく存在であるという、彼のもう一つ側面への注目を妨害してしまうかも知れない。

物語が持つ力

なぜ物語がそれほど強い力を持つかという、それは物語が「経験を意味づける作用」を持つからである。物語とは「できごとの経験についての複数の言語記述が何らかの意味のある連関によってつなぎ合わされたもの」あるいは「言葉をつなぎ合わせることによって経験を意味づける行為」と定義できる。一般に発達障がいのある人への心理教育として、しばしば「彼らを“正しく理解”し、彼らの心意を翻訳する専門家の必要性」が主張される。しかしここで言う“正しい理解”とはなんであるのかについて、私達は確信をもって語ることを躊躇せざるを得ないのではないだろうか。

ナラティブ・アプローチは、このような局面において、“正しい理解”を当事者と支援者に求めるのではなく、むしろ「多様な複数の物語」を語り合うなかから、「その状況における最も役に立つ物語を共同構成すること」を提案する。ナラティブ・アプローチは、ある個人の“正しい診断”がなんであるかということを中心としない。彼/彼女についての診断物語は複数あり得ることを認める。そして、特定の診断物語に彼を当てはめて理解するのではなく、彼の語りをまるごと尊重し、彼を物語を語る主体として尊重しようとする。しかし、単に彼/彼女の語りを受容し傾聴するだけではなく、支援者も支援者なりの物語を構築していることを自覚している。彼/彼女への支援とは、彼/彼女と支援者の両者の語りを摺り合わせる中から、新しい物語を共同構成していくことであると考えられる。

ナラティブ・アプローチの目指すもの

もちろん対話の中で共有できる物語が構成されただけで支援が終わるわけではない。このような対話を手段として用いながら、支援のニーズを明らかにし、具体的な支援の方策を策定し、支援を実践しつつ振り返るといった作業が継続的に行われることになる。このような支援のプロセス全体を通じて、語り・聴く、書く・読むという物語の交換の中から新しい物語を紡ぎ出していく作業が継続される。そのプロセスがどこに行き着くかをあらかじめ予測することはできない。支援者は彼/彼女とともに物語を紡ぎ続け、共に歩む者の役割を担うのである。

なお、以上の内容は大学等、高等教育機関における支援の経験に基づくものであり、異なった状況・環境にまで拡張できるかどうかは未検証であることをお断りしておく。

